

## 全国保育研究会に参加して

鈴 木 と く

児童福祉法施行十週年を記念して、本州・九州をつなぐ海底トンネル開通記念の祝いとを重ねて、下関市が、開催地を引受けられた。

例年ながら、暑中の八月十八・十九・二十日の三日間、都市、農山村の各施設から、乳幼児への愛情と、保育の発展を願う熱意を胸に抱いて、参加した。保母・園長・その他児童福祉事業関係の人々で、総会、研究発表、記念講演、分科会などがおこなわれた。

大会場である丘の上に立つ早稲<sup>はとむ</sup>高校講堂からは、歴史物語にもものあわれをとどめる平家の、最後の運命を決した同名の海峡が望まれ、その向うに、門司の港の山々が指呼の間につらなっている。今は、その早い流れの海ぞこを、徒歩で往来できるのである。

現在も二つの陸地に分かれ、早くはげしい流れにさかれています。底の底ではつながらあっているこの地で、乳幼児の保育に

ついての集りがひらかれたことを、現在の保育界になぞらえて感慨深いものがあつた。殊に戦後の混乱の中で連合し、また別れなければならぬ情勢の渦の中で、仕事の分担を受けもつていた私には「花のおさなご」を歌う時など、胸があつくなるのを覚えた。今は、二つの陸地で、それぞれが各自の立場から乳幼児の幸福と教育の前進のための努力を続けているが、こどもたちに、身近に接している者達は、胸の底のそこでは、いつでも、今日はぐと手を握ることができると、私は思っている。そんな時のためにも、この年々の保母の研究のためとする大会が、成長のあとを残すように進められていかなければならないと思う。

大会、という一年中の抑圧発散の場のようなお祭り行事ではなく、保母の研究を向上させることに目的をおきかえてから、もはや、数年になるが、すこしずつでもその成果は実ってきているように思われる。しかし、今なお、研究及び協議課題の受けつぎ

や、発展のさせ方におけるブロック内や、ブロック同志の連絡不十分が繰返されている感じが深い。その為、毎年の協議会が積重ねの上に発展せず、同じ円周上で人がかわってほじくりが繰返され、そこで、拍手や手つなぎや、興奮がおこって、各地に散ってゆく状態が続いているように感じられる。

出席者層は保母を対象としていても、開催地以外は、やはり、年数のたった主任級、園長、施設長級が多い。だが、あきらめて言うのではないが、若い保母たちは、研究発表を通して参加していると、自らをなぐさめているのではないかと思う。それは、年ごとに、ブロック内の、ある地域での共同研究が多くなつたことから言えると思う。一年間、若いエネルギーを長時間保育とその共同研究の仕事にかけて、発表代表を送り出す時は、ひそかにその成功を祈りながら、かげの参加を意識しているのではないかと思う。

今年の研究は、次のようなものである。

- 一、視聴覚教育について  
山口県公立保母会
- 二、幼児の声域調査について  
大阪市立保育所音楽研究部
- 三、保育所児童のI・Qの諸問題について

埼玉県（県内五地域代表十二名）

四、保育所内の動物とその観察計画について  
広島市内やわらぎ学園保母

五、高知県における保母留学制度の報告  
高知県須崎市須崎保育園

この中の四は、去る五月広島大学でおこなわれた保育学界で倉橋賞を得た研究に、その後の研究を加えての発表で、学界に出席しなかつた多くの保母のために、再度の発表をしたものと思われる。

これらの研究表に対する五人の講評者の中、いちばん保母のころの匂う高橋さやか氏の講評は、私の感想を代表していた多くのものとして、いちいちうなずけるものであった。

氏は、年々に研究テーマも、研究のまとも方も、発表のしかたも成長してきていることを感ずるが、なおやはり、研究のための研究という感が深い。乳幼児の好ましい成長発達を促す保育の、充実・発展のために、保育の現実をみつめ、その実際に即した研究をすすめてほしい、という意味のことを、一つの研究発表の評の後に言われたが、現場を知る者にとっては、胸にしみる、助言として受けとったことと思う。

共同研究、個人研究、ともににげしい長時間労働の後の、わずかな時間を、適切な指導者も得がたい地方で、各々の方を出し

合い、行きつもどりつしながら進めていることであるし、全国的にこうした研究方向をめぐらしはじめて日も浅いのであるからさまたげな欠陥のあるのは当然である。その苦勞は身にしみており、ねぎらいの気持ちにみちあふれてはいるが、ほめ、ねぎらいのことばのみに気をよくしては進歩がないのではないかと感じていたので、氏の評言を感謝して聞いた者の一人である。

二日目の研究会は、十分科会にわかれ、会場を別にして、研究主題に基き、事例、体験意見、研究結果などを中心に討議がこなわれた。

会のすすめ方は、資料発表者を主体として、パネル・ディスカッション方式をとる、その間に、バズ・セッションを折込むなどの方向が指示されていた。研究主題は次のようである。

- 第一、乳児と年少幼児の保育について
- 第二、健康管理
- 第三、給食（八円十銭での給食のあり方）その他給食完全実施の諸問題
- 第四、問題のある児童
- 第五、環境整備
- 第六、自由あそび
- 第七、保育計画
- 第八、保育に欠ける子どもとその家庭

第九、保母の生活と資質

第十、保育所の運営及び管理

私は、この中の第五分科会に、保育学界副会長荏野雅子氏他二名のかたと共に、助言者として出席した。どの分科会もそうであるが、司会者は各地の保育所保母の経験深い人達で構成されていた。発言が少なかつたり、同じ人で繰返されることを心配していたが、それが単なる不安で終ったことを喜びたい。環境整備で、熱心な討議が展開されたのは、園児の災害予防と、その発生における、園及び保母の責任の問題、その保証の問題であった。

各部会に出席した人たちの共通意見は、討議資料をもっと重点的にしぼる必要があるということだった。同じことは私の部会でも言え、時間が限られて、一つのテーマについて掘りざげがおこなわれず、広く浅く、細切れに誰かの意見をおみやげにして帰るといふ結果に終った感がある。しかし私は、望みなぎにあらずと言いたい。出席しない若い保母が、近い将来、その発言で、この欠点を訂正し、補充してくれるであらう。その苗床が各地に育てられつつあることを、この大会を通して、感じられたからである。

（東京都立高等保母学院）